



大人の熱い思いは伝わるはず

いつかの校長室だよりで「叱らないけど譲らない」という話を書いたと思います。このことは常に心の中にとどめています。何を譲らないのかを考えています。教師や親、地域の大人の立場によって譲らないことは違うのだらうと思っています。

「死ね」という言葉は使うべきじゃない

子どもさんがある出来事で気持ちがコントロールできなくなったときに、お父さんに対して「死ね」という言葉を発してしまいました。もちろん、そうなってほしいと思っているわけではありませんが、言ってしまいました。お父さんはその日の夜に「ほんとうに死んでほしいのなら今ここで殺してくれ」と子どもに話しかけました。子どもは泣きながらそんなつもりで言ったわけではないと伝え、謝りました。この言葉は子どもたちの中では当たり前に使っている言葉になってしまっています。しかし、腹が立ったから、むしゃくしゃしていたからの理由で使っている言葉ではないことが譲れないことだったのだと思います。

「自分で決めたらいいよ」の覚悟 子どもを信じきる

登校をしづっている子どもの保護者と作戦会議をしています。学校に行きにくい子どもの多くはどうしてもマイナス思考になってしまっています。さまざまなことが不安になって、行きたくないと伝えてきます。以前はその訴えに対して動揺してしまい、子どもにもその気持ちを素直に出していました。しかし作戦会議をした後からそのお母さんは覚悟をきめて「自分で決めたらいいよ」と堂々と言うようにしました。そこから子どもは自分で登校することを決めて、少しずつ登校できています。この覚悟には「子どもを信じきる」という熱い思いがあったのだと思います。またあるお母さんは子どもが行くと決めるまでしっかり子どもとの時間をとってあげようという覚悟で接することに決めたと教えてくれました。この決断も正しいと思います。

ちなみに、教頭先生も「もう何も言わないで子どもに任せよう」と決めた後から動かなかった子どもが動き出した経験を教えてくれました。

学校を遅刻したり休んだりしたら「ゲームやスマホなどのデジタルは禁止」のルール

令和6年度の学校だより春休み号でこのルールを私から提案しました。子どもの生活リズムを安定させるために、このルールを守っていますとある保護者の方から教えてもらいました。嬉しく思いました。前号で紹介した愛知県豊明市の「スマホ条例」が議会で可決されて10月から施行されます。子どもたちをスマホ依存から守るという意味では同じ提案だと思います。

ある子どもがお休みをしたときに、休むことをSNSで発信しました。それを見た別の子どもが「自分も休む」と言い出しました。子どもたちにとってスマホが日常に入り込んでいるんだと感じました。やはり大人がスマホなどの使用の制限をしてあげなくてはならないと改めて思った事例でした。